

# 高齢者施設 苦慮

認知症カフェ「Dカフェ・ラミヨ」で懇談する参加者ら—2020年12月26日、東京都目黒区



## 感染防止も 機能維持も

「1週間で衰える」

新型コロナウイルスの感染拡大が止まらず、高齢者の警戒心も緩む気配がない中、介護現場では感染対策と身体機能維持の両立に難しい試行錯誤が続いています。

「1週間動かなければ、一気に衰えてしまう」と話すのは、東京都文京区の介護付有料老人ホーム「杜の癒しハウス文京関口」の柳沼亮一施

設長(45)。50人以上が入所する施設は、感染対策でカラオケや演奏会など、入所者と地域のお年寄りの交流活動を全て中止にし、家族との面会もオンラインやガラス越しに制限しました。

個別のリハビリを強化するなど機能が落ちないよう工夫は凝らしますが、活気が減ったことは否めません。柳沼さんは「テレビ電話では家族を認識できない人もいる。自粛中に亡くなる人もおり、今の対応が正しいのか悩む」と胸の内を明かします。

認知症の高齢者やその家族らが集う「認知症カフェ」。感染拡大後、各地で休止が相次いでいますが、目黒区の「Dカフェ・ラミヨ」は、月3回の活動を休まず続けます。消毒や換気などに気を使いながら、参加者にとって貴重な「おしゃべりの場」を守ろうと力を尽くしてきました。心地よい会話は認知機能の低下防止に加え、介護する家族との関係改善にも役立つといえます。

運営するNPOの代表竹内弘道さん(77)は「カフェを閉めるのは簡単だが、認知症の人にとっては、これまで通りの生活を続けることが大切」と継続の意義を強調。「ここはいつでも開けています」と話しています。